

三國^{さんごく}傳來^{でんらい}

續瓜瓞囊^{つづりまのたね}全^{ぜん}

天竺 文殊菩薩 智慧袋
唐土 白樂天之佛性袋
日本 白髮大明神 苾芻袋

曲馬二無テ
大海ヲ渡シ國

振鷺先生戲作



へ13
2845





變此荒囊叙

長嶋町五丁目
大野屋惣八

予の家不変此乃皮の荒囊あり蓋

三國傳束の右物其酒進上大白星

とま日册と智慧乃論子入家智者也

帯の綜緝成逆中濕る束はち恵覆

小指の尻と血を取はち恵蓋とか

於此囊むのヲ至る日成洗銀星此

へ 13
2845

旧
遠
1984
5

少くも智恵第一其舍利弗の辯論金の
 革敷布りてこび八三冠法師是哉
 取ら唐国に帰る白樂天また是哉智
 慧震と号て我日本に築紫深白盤
 大明神に智恵乃海へ追かへる體ゆふ
 元唐人の天に規具日一杯のちるふ
 尔来我朝に以震と使る石はあて

あろを

震元花震を白彼むをし跡の月ハ
 州より生みか州に智者の眼より入る
 鼻より出る行程凡八百里六の壺中
 倥偬乃根をる飛つる其列市端哉
 揺るりて種を震の如く細合し
 木かいた密宗兩部は以て一部也
 袋入とハ外より布望ハ傳授也

茶表子ちび茶ちのなゆく難波橋なればしの高たか寫し々
以書このまよの行おこな止は録り事こと々々々々廉あ茶ち屋や
也あ雨り云い

寛政かんせい五ご日にち本ほん所ところ江え年ねん終しまの序ついで
閑かん運うん丑うし比ひ御み札ふた牧まき美み越こ若わの日ひ

名な屋や年ねん末まつ末まつ末まつ醉すい中ちゆう

振鷺亭主人誌



○ 總目錄

親平の礼成ちよいと志まう傳たけなほ

日本橋の長崎に守りて奉る傳なつたま

分限者よりひだうさもをくるるる傳ぶんげんしや

ちどくごらく成るる傳ちどく

神仏よりあつても頼をかゝるる傳かみふたけ

一の富成しる傳いちのふ

もちまらうの目成る傳もちまらう

あぢうよりけるめりやくの傳あぢう

親家と志まうのむ傳おやぢ

ひあんをむさうがうふわりの傳ひあん

びなんまたちまちなる傳びなん

毎日湯一めんつひふ傳まいにち

金むけの傳かね

あさあひの傳へいさうある傳あさあひ

かしら物成るる傳かしら

あけてもさまでえむ事むかりある傳あけて

双上十六ヶ條仕取の圖

一 新嫁の礼成ちよいとまのり傳



いちびのトのおとめをまんをこ成
 形にてなりともおとめせも
 ありぬあんがあがる
 卒ちありをも
 こふありいてハ
 もちてもくさねが
 かいのちが
 つぶね
 大がーまゝやまゝのどろ
 かなよどせんろうの
 らるるののむつといと
 いふとぞとああー
 あうーでうちいごとえはや
 らしてハむまらねとらまらもうねがまをいふ



かん年どのハ
 三十とあがり
 るいの小せと
 こふてハ
 さむつわれ
 ころ
 さむろろろ
 中まうがうちろろろ
 三がつて
 三のの夜
 こころ
 かけておいて
 らまてババグ
 けんをのあいてハ
 くれきく
 正月とふのハ
 なまらあひの
 あまのの
 りだちとつて
 せをさるるむらぐらぐらハ
 おとこでな

③ 日本橋を名跡に守りてくる傳

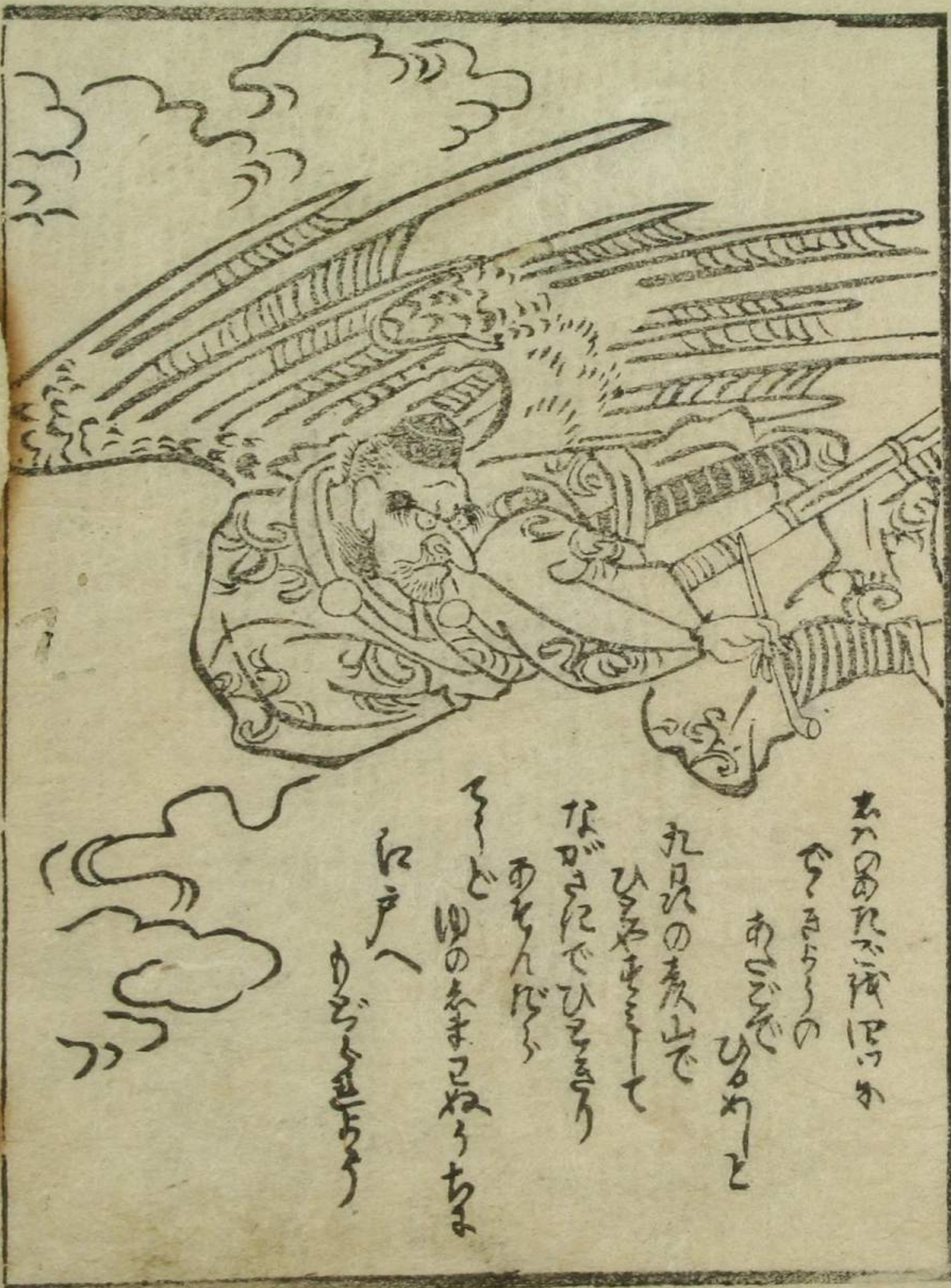
やまごたごた

「あんなびびりなことをしなは
#のうらなごちやなを

ひらかりたる



こらまんが
やろろがあき
よこてしん
まがらとれかえ
やつわろこらまんをるは
のめり



あつめられたはつか
ちまらうの
あつめられた
丸山の素山で
ひらきまわして
ながさたでひらき
あつめられた
しんご
あつめられた
にんご
あつめられた

⑤ 神仏 (カミツク) ともてふては 若狭の 伝 (ツタエ)



神仏 (カミツク) 伝 (ツタエ) の 畠 (ノヘ)

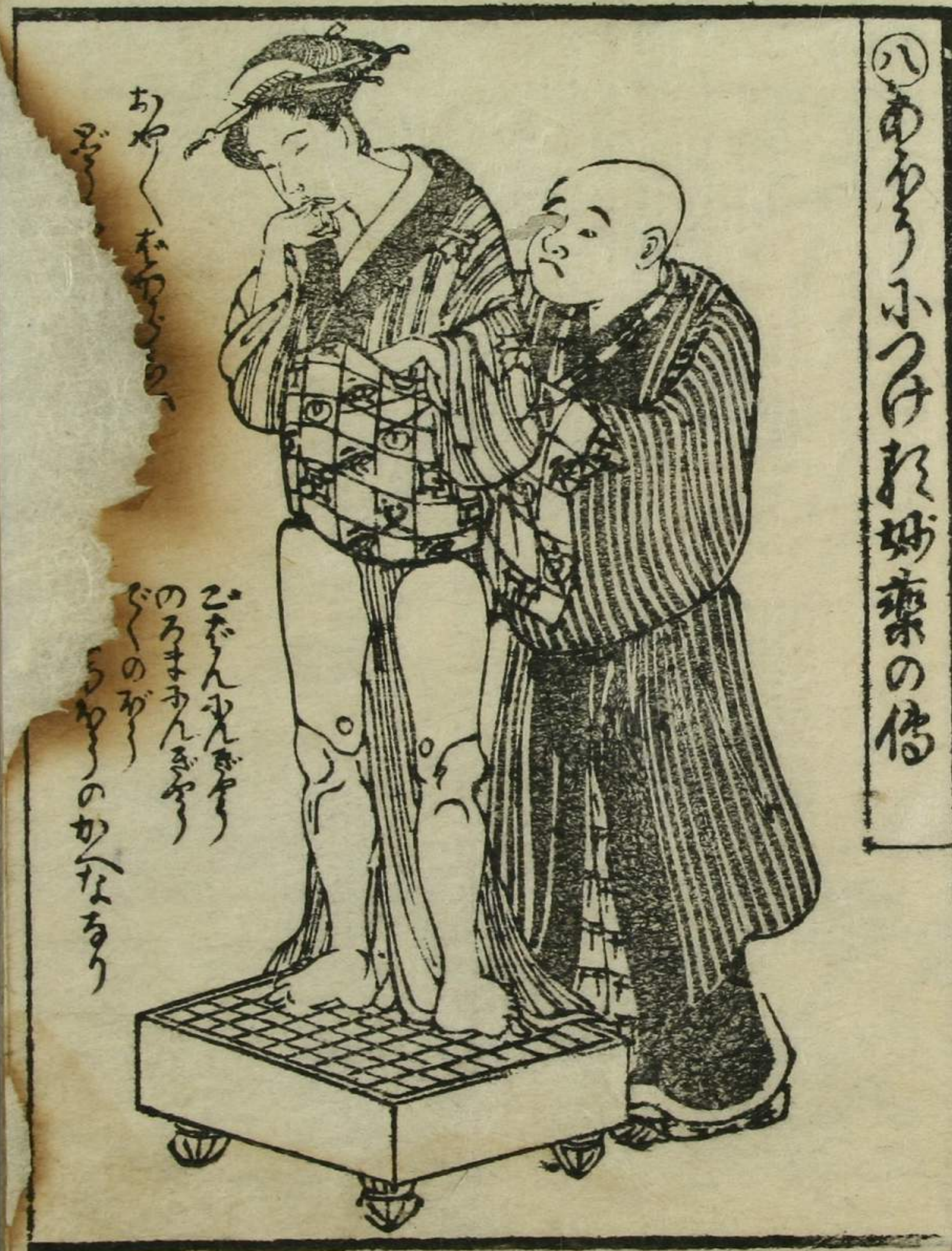
神のるく
たつと十万人であや
づけやしけりことむ
らふま大ざらん
あたらしくいと
ぬらぐらふあうの
まありや
だまうてまわ
ておののさ
仏のま
こたがふあら
とこらん
こころが
たのしき
まつてはね
ひのをあうて
るもあきえねく

⑥ 一の富城 (とみしろ) とる傳 (ツタエ)



珠 (たま) の 心 (こころ)
おとてんゆりのちりが六士(むし)は
いさやま百年(ひゃくねん)にまあること
のま
まをえを
わそを
あてね
こと
あふた念(ねん)ふ
かまのこみのよ
をりた
一分のさ
ありた
るんて
わでま
おとてん
たつと十万人のちらの中(なか)に
あたらしくわしてあ。

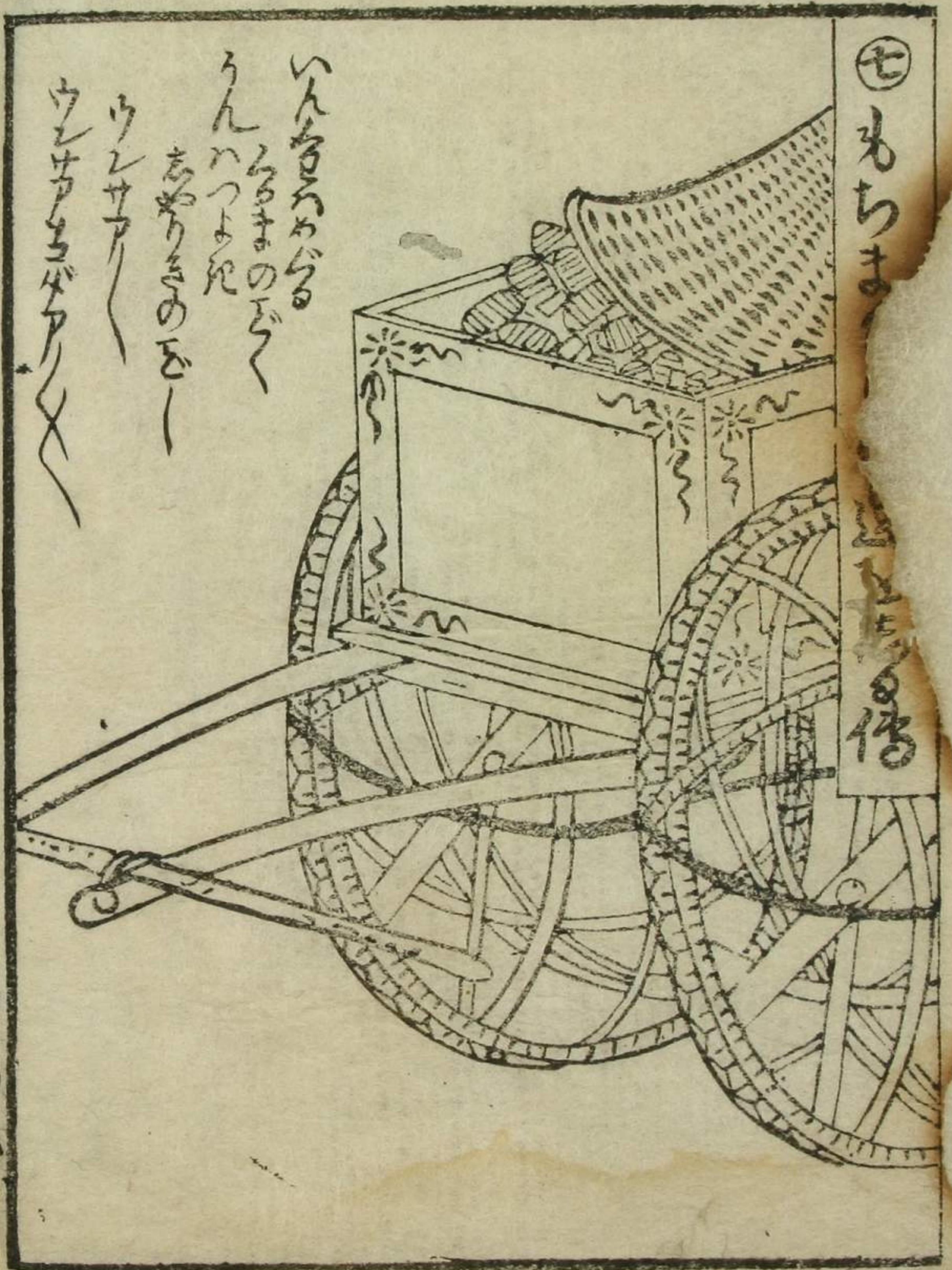
ゆみもであんぞうを
あだのけんとくでかこ
あだのあわのせん
れめい
ついでる



⑧ 八重やうふつにけねば薬の傳

おや〜わあ〜

おたんさんかき
のろまんきや
ぢくのぢ
ちやうのかたなり



⑦ もちま

いんちんちん
らんまのどく
らんいつしん
ちやうきのと
ウレサア
ウレサア
ウレサア

ちやう



あつたの
まゝ
つたが
あつた

あつたの
まゝ
つたが
あつた

あつたの
まゝ
つたが
あつた

あつたの
まゝ
つたが
あつた

あつたの
まゝ
つたが
あつた



丸 我教のち成をとり来てたのむ信

あつたの
まゝ
つたが
あつた

あつたの
まゝ
つたが
あつた

あつたの
まゝ
つたが
あつた

あつたの
まゝ
つたが
あつた

⑩ 眞男まおとこはれちまらちたるの傳

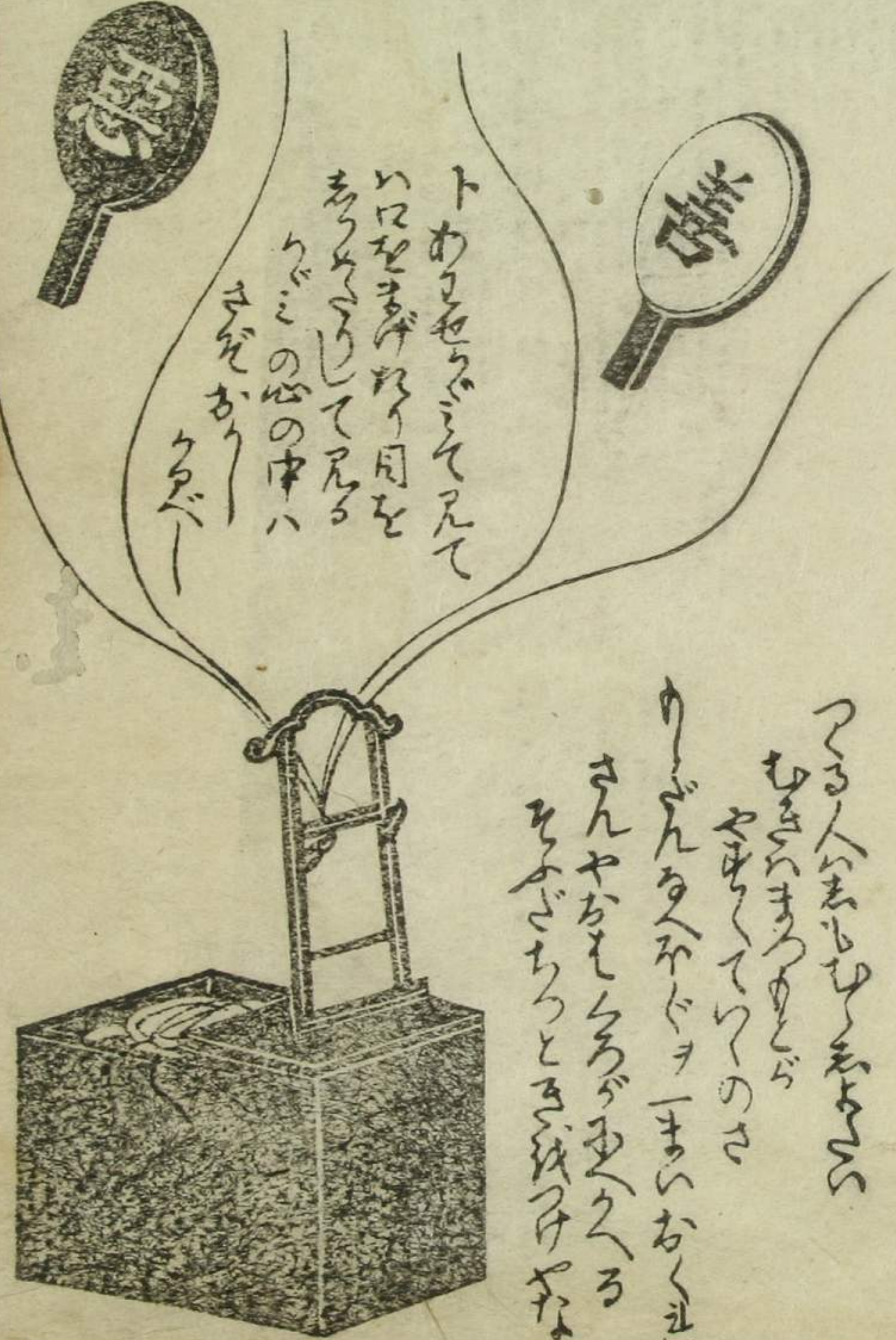
このころまはる
 せぬしころ
 るされのいろのむらた
 のまをびまきぐろの
 よい
 むらや
 あやけが
 だうよあこ
 がらなぬの松のまはる
 電か一箇の
 つみとらまも
 くらとまうぐまんぞ
 いのら成てままきやま三冊六がまのさだ
 たりいかりりるまきさなり



いふゆゑに
 あつてとんだ
 ふぢりだ

⑪ 眞人まひとはむらぐらうまゆり傳

この人のまはるまはる
 ちまひまらぬ
 やましくてつこのさ
 りじんを人ぶとマ一まいなくま
 さんやあもくろがま久入る
 そまざちらとまはるけやな



⑤ 毎日袴一枚のむろの傳



ひろ ころもやア
 やぶらみん
 かゑ らまぬ

④ 全りふけの傳



美人茶屋
 びざん茶屋

そ
 十
 の
 り
 び
 低
 小
 お
 あ
 ま

まんぎん
 の

おん
 の

傳授極秘卷

傳授世よ知事感念を以て物ありと名号が家小
ひねむく巫の靈風の後乃荒蕪を書肆ひり
たく蓮華の筆賦布して金のふけの虎の巻
おと巻よ出板せしむ皆著法を紙付てきま
えぬ巨焼の上より聞となさしと名に發すべし

ふくら十四

○年終の礼とちまんとまきう傳

いし律を礼よまらるる末二首もひねるのいそを上げたり
のありとて決まらばよ小終二首もひねるのいそを上げたり
と名れとまのせもありとてひねるのいそを上げたり
とあつと名れとまのせもありとてひねるのいそを上げたり
まのせもありとてひねるのいそを上げたり
ふねをひねるとまのせもありとてひねるのいそを上げたり
二首もひねるとまのせもありとてひねるのいそを上げたり

○日本橋の長崎守りてりうり傳

下りの網をわし製之敷のとうがらびとの時あり伏
ふ六網の狼小敷のとうがらびとを先取らん世世伏網
海ふあり耐敷法をうつてとうの板ふらまじりともある
が佛さうのあさうやうをさうまのともをんがま
をらうと口磁切てはばこわいまのともをな
海原梨の鏡よりぬきたる耐しやうわたるがた
あんぶさうやハヤラホウホウくせきをあらホウくせんぐ
今や大息と鏡よりぬきたる耐しやうわたるがた
かや合に耐遠もあるまのともをなをなをな

り海より最夫とさうありきくと所一敷方ありび
小内方ありお後のう人ありきと

○神佛小ざありのち耐法か重なりを傳

大病人小ころ成れ余りけの大能也而度まうとて
せり骨とありん神仏のおさうなまをせとてあくと
これ必人よりいひせむとらうのちたりのあり先のかせ
のまゝあひかると七日取食をうとくぬの外より
一心神仏と念とてさうまのちをなをなをなをな
中あり又金瓶の形ありふはありて風を極意の中

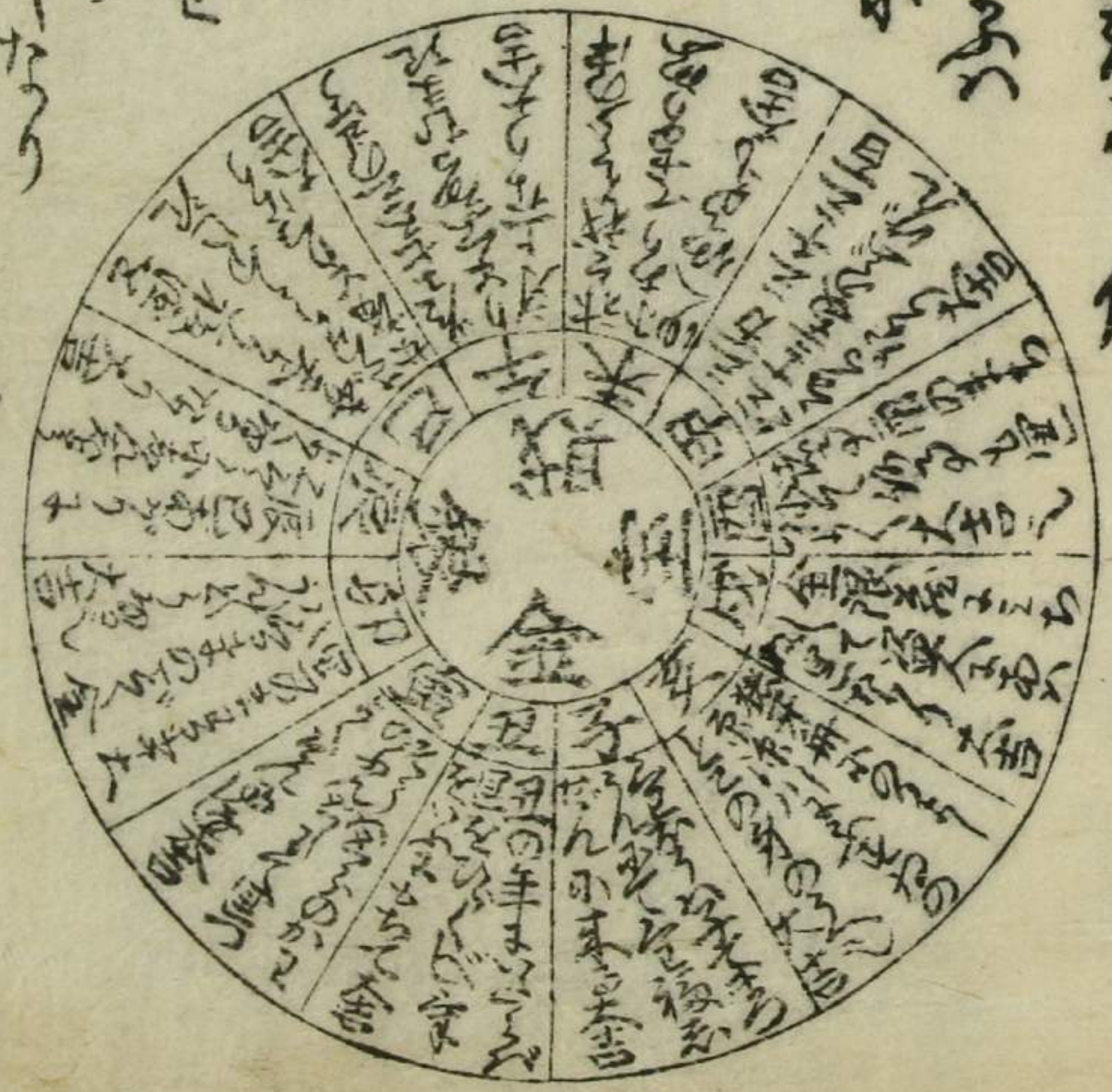
志こそある極道の道より貴ぶるよりの大能成りけ
 一 けりまのの心も竹もねむをもちしりて
 心をいともんるのまらね成なり

○一の富とともる傳

といふとまらねとれのからなりあつて
 人形は九百九拾九本の打とあつて
 といふ時より青敷小あつて人形の打成へる
 とひねる実人ひまびきこれ成定の中より
 志きりの實後もたのいふ

○技の運成ある傳

けまらあつてのいふ
 むまれ年よりいふ
 くらして古目よあつて
 うんくちあつて
 成末たのりいふ
 強く成業のせいを
 といふ成のあつて合せ
 といふ成のせいを合せ



といふ成のせいを合せ
 といふ成のせいを合せ

○あやうふける妙薬の傳

又リくともうむなげらるるにシテシテリくとおあひらひに
ベリくともほうに張るるフタリくとおあひらひあまの
るま^{ツル}人^{ツル}取のよふあやめをいせなるをせまふ先^{ツル}日の
勢^セ法^ホへふぬをむぬのむむと乃^ナお^オ成^シ志^シをりてあまの
て^ツ実^ミあ^アま^マをこをいせらるるひま^ヒま^マだ^ダよ^ヨあ^アる^ルあ^アま^マう^ウぶ^ブな
男^オのこ^コえ^エあ^アま^マの^ノ筋^シ骨^ボを^ヲ粉^コみ^テ右^ミの^ノ志^シを^リあ
ま^マの^ノま^マを^ラら^ラう^ウの^ノま^マげ^ゲ巻^マの^ノま^マと^シて^シ成^シま^マげ^ゲを
せ^セら^ラま^マら^ラも^モい^イせ^セの^ノふ^フなる^ルゆ^ユ妙^{ミョウ}なり

○我家城たふ芝居を承りてたのむ傳

家の^カの^ノち^チり^リる^ル時^{トキ}を^シ承^シり^テ芝^シ居^イも^トい^ハぬ^ルゆ^ユの^ノあ^アま^マ
ひ^ヒ成^シニ^ニツ^ツラ^ラし^シて^テあ^アま^マの^ノ幕^{マク}を^ラら^ラう^ウと^シて^シ世^セを^シ
い^イな^ナご^ゴう^ウあ^アま^マね^ネを^シ成^シ食^シし^シ焼^シ燭^シの^ノお^オひ^ヒ成^シう^ウご^ゴ物^{モノ}
せ^セら^ラお^オん^ンゆ^ユじ^ジ何^{ナニ}と^シる^ル芝^シ居^イの^ノ山^{ヤマ}を^シひ^ヒが^ガよ^ヨる^ルあ^アま^マう^ウ
あ^アま^マの^ノ板^{イタ}と^シ廊^{ロウ}下^カの^ノま^マを^シら^ラう^ウあ^アま^マて^テ芝^シ居^イを^シ承^シり^テあ^アま^マ
あ^アま^マの^ノま^マを^シ承^シり^テあ^アま^マの^ノ内^{ウチ}を^シ承^シり^テあ^アま^マの^ノま^マを^シ
独^{ヒト}を^シ承^シり^テあ^アま^マの^ノ二^ニ階^{カイ}を^シ承^シり^テあ^アま^マの^ノ上^{ウエ}を^シ承^シり^テあ^アま^マ
と^シて^シあ^アま^マの^ノ城^{シロ}は^シ五^イあ^アま^マの^ノま^マを^シ承^シり^テあ^アま^マの^ノま^マを^シ

のちやうとつづふくとして存代の方よりあつたを
とつちがうねころんでわきの用むる成むなごんあつた
て七つ小原をやくちをちりてき持たわいの首
尾をくとおちりてつねねるたまうちの敷がわけ
にわが女帝のてぬおんりれどもよんどころあひあ人
もぐこまゆくろくかをささぬ月揚のま実があつて
タアも一又なうよあそんでうろを軽肉のあつてもよ
ろろて雲森まであつた心の中の大いなる
こま成おどつてつとよ

○ 小原小原成法なるなをせつ

市の日小五等の塔のまをせん小あつてびいどろ焼
成かきうちてん金であるところの人だらうなるなるの
中できつりつて小男あはれ兼て豆根をさすのまはほび
あつたをうりしくとましくじめはまをば鶴の豆成ひらふ
とく大勢をのちうぐう成成るのまをうりし人こまう
くと首の上にくとあつたともあつたといつてつねのよふ小
柳あつたは飛あつたよふと首をうりし成
同ぢりてうろく成のどく塔のうろくを首成つりよる

なつてあまう有りともう成懐の事であつてさう
の紙で敷をつつと綿よもんで染つちあまうのうをり
わて中一のつらぬふふお持ちの差がもくが二のめま
でもうは舞をえ毎年三月三日お出でたの
志を土用下にも出づり中一ぬままきのおまづつひ
なくあまうといふゆゑくちあまうをえは出でたの
かんがうがあまうのまをまらうがたののころのまはな
み成いをもおはごえをせざるゆゑあまうのまはな
一ふ相借してごつく借といふあり

○毎日一たびひふ借

先九門の如くだは切り金のまををまえては中
をうをりくとえあまうは往來の人へあつてあまうに
金があつてもころちお金おんとさうく金のつらぬ成
ひふありまがうの差を二番ひらいて是は借を
つらうもじつと入招よるなり又その金の皮を二かご
ひらいてさうごりあまうもじつと入招よるなりをれが
大木戸のせうこの鉄をまててさう成せられたあまうもじつ
と拾ひ文とならるの二毛猫をえあまうもじつと

元服の廿二歳より少くして廿三歳に於て亦買たより
はつた小切と金を二町とひらひらに替目二十文と
たうたてに百文の辨とたるこまこまが智恵をこまが
九文辨小まるとさうめんを水伴傳といふさう
あんまりかわるはれちよびあり一茶と一おちと
かゝつたかんめんおし

○金おけの傳

富士の山に船様ありて一人のつてゆき十二文づ
みそみで成でうらしてお茶をあらがもせといふとだ

さうある辨りよいらはははの金で千里が竹法實
とて富士を越え虎子を三足をなして日本にさう
つて時をふた虎子をうらして殺牛足とあり富士の
元山も竹山とたより金かうやくとさうなるやど
らふおぼしこれ成お傳といふ

○高内のあるさう小ある傳

何棚よりさうに徳場よきさうさうの番頭の後よ
あんま成ひさうつひあつてさうの下さうめんさう
のすのりあさうらひてさうさうせあくと番頭

どなたの安士をなさるはるの廟子^{あやふ}はひふれ龍^ねがかさ
とらたの刀とてみ半むうらでとまづらげんなうを
とみちのちもたてたあひらをあり^{あや}ありこれハ是
でんづらん大とて天の地直^{あま}信たうり

板元 多田屋利兵衛

目出大尾

